労働組合運動の強化に活動家とともに献身された労働問題研究者

ー高木督夫、戸木田嘉久、黒川俊雄、三先生の追想ー

理事　　芹澤　寿良

今年に入って、長い間、特に1960年代～1980年代に労働組合の中、または周辺で日本の労働組合運動全体の強化、前進のために活動してきた幹部、活動家、若手の研究者たちと人間的な深いお付き合いを通して、運動の理論、政策、文化、戦術・戦略についての友好的な議論、相互協力の調査、研究に参加され、労働問題専門の先輩研究者、学者として厳しい助言、教育、指導を惜しまれなかった高木督夫(2012年12月8日、90歳)、戸木田嘉久(2013年2月26日、88歳)、黒川俊雄(2013年3月21日、89歳) の三先生が相次いで他界された。

それぞれ長寿を全うされたとはいえ、大きな喪失感を持つものである。改めて御逝去を悼み、心よりお悔やみ申し上げるともに、多くの業績を遺され、優れた実践的理論家として労働組合運動に献身されたお三方についての私の若干の思い出を記させていただきたいと思う。

私は、戦後の 1950 年代という激動期に、早稲田大学で多くの学友たちと高揚した学生運動に参加し、占領軍による大学教員の「レッドパージ」反対闘争をはじめとする「大学の自治と学問の自由」を守る闘い、学生選挙権行使を制限する自治庁通達撤回闘争などを闘い、また労働問題、とくに労働者の権利を保障した労働法に関心を持ち、その面の勉強を続けていた。

1954年大学卒業後、直ぐに指導教官だった早大野村平爾先生（故人）の推薦で鉄鋼労連書記局に勤務することになり、以後22年間、1976年健康上の理由で転職するまで、労働組合運動と直接関係して生活した。この間に他の多くの学者、研究者、弁護士の方々との関係が出来て、なかでも都立大沼田稲次郎（故人）、明治大松岡三郎の両先生（故人）にも多くのことを教えていただき、単産における労働組合の法規・労働協約、合理化対策の担当書記として、与えられた専門的な任務は果たしたと思っている。

その後は、一時期、労働者教育協会の運動に関係し、1979年から1998年まで高知短期大学の教員として労働問題の教育と研究に従事し、退職してからは、今日も法政大学大原社会問題研究所、労働者教育協会、労働運動総合研究所の運動に係わって同じく労働組合運動の周辺で比較的元気に関係者のみなさんと高齢期の生活を続けている。

鉄鋼労連は、1951年の結成と同時に前年に結成された新しいナショナルセンターに加盟したため、私の仕事の面でも総評運動との関係がだんだん深まり、関係の諸会議と交流を通して他の全国単産の方々、とくに書記クラスの方と親しくなり、多くの労働問題や労働組合運動の動向への関心も広がって知識も豊富化し、総評だけでなく他の労働組合ともお付き合いしている学者、研究者、弁護士、ジャーナリストとの交流も当然進んで私自身の成長を促してくれた。

ここで、その時代に、それぞれの単産で有能な書記として活躍され、お世話になり、今日鬼籍に入られている方々のお名前を、ここで挙げさせていただくと、早稲田大学の学生運動出身者は、石垣辰男（電機労連）、堀越稔（合化労連）、柴田嘉彦（総評）、及川　孝（食品労連）、清水　明（総評）の各氏である。これらの方々ともに長くお付き合い頂いた庄司博一（紙パ労連）、桜井絹江（日建協）、小川善作（全造船機械）、川口和子（全専売）四氏も忘れられない親しい書記仲間であった。

なお、鉄鋼労連の書記局で在職中にともに働いた仲間では、千葉利雄、山村信吾、嘉数能智、鬼窪健次、荘加　武、今里　宏の各氏がすでに亡くなり、高い能力と責任、情熱をもって尽力されたさまざまの姿が想い出される方々である。存命の仲間は、私と上田健二郎（不破哲三）横山　進、高橋昭夫、斎藤徳次の各氏で消息不明が西山一郎氏となっている。

私の鉄鋼労連内での書記として入職1年目からの主要な活動は、労働基本権の行使をめぐって生ずる諸問題への対応策の立案と実践化で、これについては、学者では野村、沼田、松岡の三先生をはじめ、そのお弟子にあたる島田信義、佐藤昭夫、中山和久、籾井常喜（以上早稲田大）、山本吉人（故人茨城大）、横井芳弘（故人中央大）、弁護士の佐伯静治（故人）、東城守一（故人）、内藤　功などの諸先生のご指導も受け、総評運動の権利の防衛と拡大のたたかいを発展させるために精力的に活動した。

そしたなかで、忘れ難い総評の権利闘争の大きな成果として言えるものは1969年9月に作成、編集した『権利闘争の前進のために』である。私も鉄鋼労連からメンバーとして参加して労使関係法専門員会が学者・研究者、総評弁護団、加盟組織担当者の総力を挙げて作成したもので、その後の総評運動の権利闘争の基本的指針として活用されていった。

① 戸木田嘉久先生との出会い―三井三池闘争と大企業労働組合運動

私は、1950年代の後半期における鉄鋼労連運動の高揚を体感し、歴史的な1957年秋（ゼロ回答―11波19日スト）、1959年春の賃金闘争（800円の一発回答―49日間重点部分スト）、1960年の三井三池の大量解雇反対闘争、日米安保協定反対闘争にも参加して、それらの敗北と前進のなかから日本の労働組合運動の進むべき方向とそれに相応しい路線―労働組合、労使関係の基礎理論をしっかりと学び、身につけること、そして常に労働組合運動情勢の全体的把握に努めることの必要性を痛感した。

1960年4月下旬に私は、右傾化が始まる直前の鉄鋼労連の西口義人委員長（八幡製鉄出身）を団長とする三池争議　支援鉄鋼労連オルグ団23名の一員として5日間、緊張の高まる三池を訪問、社宅訪問、主婦会との交流懇談、集会、デモへの参加を行い、「全国の支援が勝敗の鍵」ということを確認して帰京し、オルグ団として「一層の支援と三池闘争と安保闘争を結合した政治闘争の積極的推進を」という報告、提起をおこなったのであった。

しかし、安保闘争後、政財界の一体となった労働組合右傾化工作が本格化し、1960年秋の鉄鋼労連大会で八幡製鉄労組出身の宮田義二氏が三役（書記次長）に選出されて以降、書記長、中央執行委員長になるについて急速に進められ、大企業労組の「体質改善」が完成、1970年までに階級的民主的な勢力は、各級の組合機関から一掃されていったのである。

戸木田嘉久先生のお名前と活動を知ったのは、三井三池の闘争が開始される頃で、九州産業労働科学研究所（九産労）の所報に、事務局長として九州地方の石炭「合理化」の情勢や炭労の動向を書いておられ、それを読んだことからであった。天野順二、正田誠一、三好宏一という研究者のお名前、そして、暫くして研究所で鉄鋼問題の調査研究をされていた原　嘉彦氏（故人）の存在も知って、月報を定期的に読むようになったと思っている。

こうしたなかで、戸木田先生と原先生とは、その後1960年～70年代を通して民間大企業の労使関係と労働組合運動に関する諸問題の研究、討論、執筆の面でいろいろとご指導を頂く関係となった。

戸木田先生は、長期に亘った大規模な三井三池闘争終結した翌年の1961年2月に、これまでの三井三池闘争の調査報告を整理分析した闘争総括と今後の炭鉱「合理化」反対闘争路線への提言の書といって良い『労働組合はどう変わるか一三池闘争をへて』(三一新書、294 ページ)を刊行されたのであった。

その内容は、三井三池闘争は、解雇を撤回出来ず、組織の分裂を許し「敗北」したが、全国的な階級的連帯の支援を得て、国家権力機構の全面的動員にも屈せずに闘い続けて安保反対闘争を前進させた歴史的闘争となった。しかし、敗北した。その原因として、三池労組、炭労、総評の指導部の積極的指導性が企業主義的戦闘性の範囲内に留まり、「合理化」反対闘争として職場を基礎として産業別統一闘争、全国的統一闘争を目的意識的に追求する観点が弱かった点にあるとしたものであった。

戸木田先生の、この終結直後の総括は、私自身の経験からの観察と認識からも十分に納得できるもので、日本の支配層の攻勢と闘う労働組合運動の基本的な戦略、戦術がここにあるという確信となったと思っている。

早速購入し、何度となく目を通して労働運動に取り組む勇気と確信を得た書として、50年以上経過した今でもその初版本を大切に所有している。当時、鉄鋼労連運動での九州では八幡製鉄の活動者集団が資本の攻勢と闘っていたが、先生のこの書に勇気を得たことであろう。

その後、戸木田先生が京都に移られてから、お目にかかる機会も増え、先生の研究領域も広げられて、民間大企業の労使関係と産業別組織、ナショナルセンターを視野に入れた理論、政策、組織・運動面の諸テーマに取り組まれていた。

戸木田先生と直接はじめてお会いしたのは、三池闘争が終結し、炭労と総評主導の石炭政策転換闘争が進められ、先生も九州から立命館大学へ転出され、そのなかで1965年に『現代の合理化と労働運動』を出版されるということで、それに鉄鋼業分野の問題と運動について一定のご協力を要請された時であった。鉄鋼労連本部で掌握していた労働者状態や方針をお話したことを記憶している。

1980年代初めには戸木田嘉久、原嘉彦、木元進一郎、高木督夫と向笠良一(何れも故人)の諸先生を中心に研究者集団が鉄鋼、電機、造船、自動車、化学・紙パルプの活動家集団が協力して『工場調査　巨大工場と労働者階級』(上・下)を刊行。私が戸木田先生と連名で「右翼的潮流の社会経済的潮流の動揺」を執筆した。

また1966年に発刊された『労働。農民運動』(後に『労働運動』と改名)の編集会議的な会合で、木元進一郎先生や中林賢二郎先生(故人)など他の諸先生をも交えていろいろと議論し、教えられたのであった。

このような推移のなかで、労働者教育協会が1968年頃から開始した「勤労者通信大学」の運動、とくに労働組合コースの運営面で、労働運動の階級闘争論の左派的立場に立つ中林賢二郎、高木督夫、黒川俊雄、戸木田嘉久の諸先生のご指導をより積極的に受けるようになっていった。そして私自身も、鉄鋼労連書記の本業とともに、労働者教育協会の活動に係わることになり、今日まで続いている。

当時、労働問題、労働運動の専門誌としては、「労働法律旬報」、「労働経済旬報」、「月刊労働問題」、「学習の友」、そして「労働農民運動」(「労働運動」)などがあり、諸先生は、これらの雑誌に積極的に労働組合運動の強化の観点から労働者状態の調査分析、政策提起、実践的な運動論の展開などの論稿を発表され、また数多くの関係図書を刊行して、闘う組合幹部、活動家

を励まされたのであった。多くの方々は、それらを通し諸先生のシャープな理論、政策、運動論を学び、受容して、運動に確信を抱き、運動家としての能力を磨き、成長していったと思っている。

② 高木督夫先生の思い出—日本の賃金問題研究と経済危機下の運動提言

高木督夫先生は、賃金問題研究の専門家として、今日も元気に活躍されている下山房雄さんが労働科学研究所で仕事を始められた頃、すでに労研におられたとのことであるが、その後間もなく法政大学工学部の教員になられ、1992年に同大学を定年退職されている。

全国単産の賃金問題担当書記の皆さんとの交流を積極的に進められて、60年代から民間大企業に導入された職務給、職能給を中心する賃金問題の調査、研究を全国単産の先にご紹介した学生運動出身の石垣、堀越、鬼窪の各氏らと重ねられていた。

そうしたなかで、先生は、私の鉄鋼労連書記時代の友人で法政大学出身の「資本論」研究、教育のベテランだった鬼窪健次（賃金問題担当、ペンネーム・深見謙介）君（故人）との共著、『賃金体系と労働組合』（上・下）を1974年に出版されている。これは左派労働運動サイドでは一般的な賃金の基礎理論教育に比べて弱いとされていた職務・職能給、賃金体系問題を分かりやすく解明したもので、かなり好評で運動に活用されたとのことである。鬼窪君は、亡くなられた当時は、鉄鋼労連を退職し、結成後の全労連書記局で活動していた。

高木先生は、その後、たしか二、三度イタリアに長期留学され、再び高揚に向かいつつあったヨーロッパの闘う労働組合運動の現状を、現地から報告されて、日本の闘う労働組合の幹部、活動家を激励されていた。そんな事情で直接お目にかかって話し合う機会はなくなっていた。

1980年代に入って、国際労働運動の動向を視野に入れて、日本の階級的民主的労働組合運動を発展させる見地から、その担い手、前進方向、展望を論じ、提起した論稿を提起されて、私達の視野をより広く持つ必要性を指摘されたと思っている。『経済危機と労働組合運動』（1982年）と『日本の経済危機と労働組合運動』（1994年）がそれにあたる書といえよう。

また、先生は、この間に開始された国鉄の分割民営化の20年余にわたる大攻勢が開始され、それに国労が果敢な闘争を進めていた段階のその姿を紹介した『国鉄労働組合—歴史・現状と現実』（1993年）を法政大学大原社研の早川征一郎氏との共著を表し、国労闘争の当時の姿と歴史的意義を社会的に明らかにて運動に貢献されたのであった。

20数年間の紆余曲折の国鉄1047名解雇反対闘争に私は、その闘争の大同団結にかなり苦労した経験を持つており、早川先生には貴重なご協力を得たが、高木先生には、たしか当時、健康を害されているということで、その機会をもつことができなかった。運動の経過と「政治的和解」にどんなご感想を持たれたことか、ご意見を聞けなかったことが残念に思われてならない。

先生は、なかなかの議論好きで、お目にかかった時など、笑顔で「最近はどうですか」「どう思いますか」と口を切られ、議論のなかでは、はっきりと「それは違う」とご自分の意見を出されたことが思い出され、各種の議論に積極的にお付き合いいただいた。

1970年代の中ごろに高木さんと同じ法政大の同僚の中林賢二郎先生（1986年没　享年66歳）と全造船の書記小川善作さん（故人）の発案で西武新宿線沿線に住む労働運動に関係している研究者、組合役員、書記、ジャーナリストが集まって「沿線の会」を設けて年一、二回集まっ

て酒を飲み交わす懇親の機会をもっていたが、高木さんも沿線に住む関係者として、確か何回か参加されてみなさんと楽しくお喋りしていたのではなかったかと思っている。

③ 黒川俊雄先生の思い出—全国一律最低賃金制の先駆的指導

黒川先生は、気楽に労働組合に足を運び、幹部、活動家と懇談出来る方で、ナショナルセンターの枠を超えた金属関係労組の共闘組織としてまとまっていた「金属共闘会議」に興味をもって、その中心としての活動力をもった全国金属に接近し、人間的に陽気な者同士として、佐竹五三九書記長（後、委員長就任、故人）と馬があって親しくなったのであろう。私も全国金属との関係を通して黒川先生と知り合い、当時、先生の日本の低賃金構造論を学び、全国一率最低賃金制の意義と闘争の重要性を教えられ、鉄鋼労連の組合員向けの最低賃金制闘争の教育宣伝のパンフレットを作成したのであった。

先生は、また1955年に結成された日本生産性本部の活動が1960年以降活発化し、労働組合運動への影響力を強よめていた時期に、その本質、役割を批判的に捉えた『日本生産性本部』という本を佐竹氏と共編者で刊行したが、これには実践的研究者仲間の川辺平八郎氏、永山利和氏、後藤実氏らが協力していた。

私の記憶では、先生は、労働組合の大会を重視され、総評大会などにも良く足を運んでおられたが、たまたまご一緒した時など、路線論争では「高野派」か「岩井派」が、発言者の立場や議論の状況、ポイントなどを分かり易く解説していただいたことがあった。そうしたことでも、黒川先生は、当時の労働問題の研究者のなかでも現実の労働組合運動の現状、動向に関心を持っていて、労働組合情勢に詳しいお一人であったと思う。

戦後の1960年代から1970年代における全国金属、炭労、全日自労などの全国一率最低賃金制要求を掲げた運動の一定の高揚には、黒川先生の最低賃金制論が果たした先駆的役割は極めて大きなものがあったと思っている。

先生は、労働組合運動による全国一律の最低賃金制闘争が停滞、衰退していくなかでも、確か全労連全国一般の幹部、活動家の皆さんと地道に関心をもつ中小零細企業の労働者や労働組合運動を対象にした学習、教育の取り組みを粘り強く続けて、その状況を雑誌などで報告されていた。

そして、各関係分野からで改めて社会的関心が高まるなかで10年程前に、各分野の方々による「最賃研究会」の活動の研究、討論の成果として、黒川俊雄編・小越洋之助著の『全国一律最賃制を軸としたナショナル・ミニマム－国民生活の最低限度を保障する制度の確立を』をまとめられている。

先生の一貫して最低賃金制闘争の前進に努力されたことに対しては心からの敬意を表するものである。

私は、1971年初夏に鉄鋼労連のヨーロッパ労働事情調査団（労働組合組織と職場における組合活動権の行使）に参加して、１ヶ月ほど各国を廻ったが、その途中たまたまパリの喫茶店でフランスに留学、滞在中の黒川先生にお会いし、あれこれ話し合ったなかで、先生からＣＧＴの組合員教育についてもお話しして頂いたと思っている。先生は、その後金属共闘や全国金属あたりからもＣＧＴのその関係の資料を入手して研究されていたようで、その後しばらくして、フランスＣＧＴ（労働総同盟）の中級用の組合教科書を翻訳出版され、日本の組合幹部や活動家、

労働者教育運動の関係者の間で話題になったことを記憶している。それは『労働組合運動と経済学』(1978年)と『労働組合の組織と活動』(1979年)の2冊である。この種のものが日本の運動に紹介されたのははじめてだったのではないかと思っている。

黒川先生は、また1970年代初頭の全日自労の「失業対策事業廃止反対闘争」から失業者・中高年者の仕事づくりをめざす事業団活動がスタートし、その後紆余曲折をへて今日に至っている労働者協同組合運動(「協同労働の協同組合」)に対して、冨沢賢治氏や角瀬保雄氏らとともに支援に参加し、その存在意義を理論的、歴史的にも正当化する仕事を進めて、1985年には「地域コミュニティー・労働者協同組合研究会」を立ち上げ、1993年には『いまなぜ労働者協同組合か』を刊行していたのである。

この運動については、いまでもさまざまな議論が行われているが、それらを乗り越えて各種の「協同労働の協同組合」が各地につくられて、地域住民の生活と福祉を現実的に守る運動となって広く社会的関心を集めており、おそらく先生もこうした現状を喜んでおられることであろう。

④　先生の共通点—労働者、活動家集団への信頼と労働組合運動発展への強い期待をもった活動

以上、三先生について、私との係わりで、幾つかの思い出を書いてきたが、なかには記憶違いがあるかも知れないので、それらについては率直にご指摘頂き、補正していきたいと思っている。

わが国における戦後の労働組合運動、労働問題、労資関係の優れた研究業績を残し、日本社会の変革への主役を期待した階級的、民主的な労働組合運動の強化のために、職場で働き、活動する労働者と労働組合の幹部、活動家との接触、交流を積極的に求め、そのなかでの調査、研究、助言を可能な限り報告書、論稿、講演の形で広く公にされていた数少ない実践的研究者が高木、戸木田、黒川の三先生であったといっても決して過言ではないであろう。

大学の研究者の多くは、海外研修に出てその成果を帰国後公表しているが、この三先生もヨーロッパ諸国へ留学され、共通してその研究過程でも関係国の役立つ労働組合運動情報を日本の労働組合組織や幹部、活動家、研究者、労働雑誌などに適宜報告、通信を送り続けていた点でも意欲的であった。

現在の私の周辺にも多くの労働問題研究者がいて、それぞれ研究業績を発表しているが、この三先生が堅持した以上のような基本的研究姿勢にも学びそれぞれの研究活動を運動への貢献を意識し、広い見地から積極的、意欲的に進めて頂きたいものだという感想をもつものである。

最後に、三先生と中林先生がこうした研究、活動の基本姿勢から、1970年代に労働組合運動の階級的、民主的潮流の幾つかの全国的な研究集会や労働学校に揃って参加されていたことを二、三追加的にご紹介しおきたい。

▼1966年に創刊された『労働・農民運動』誌が1971年から75年までの5年間、毎年「夏の労働学校」を伊豆温泉で開催していたが、戸木田先生が第1回学校で「国家独占資本主義下の政策的諸問題—民主的変革への政策課題」、第2回学校で「労働組合運動の当面している政策的課題」を講義し、高木先生が産業別分散会で「教育労働者」の問題を行っている。第3回学校

では、中林先生と戸木田先生が「さまざまな反共主義・労資協調主義との闘争」が講義を担当、第4回学校では、平野浩一名で私が「アメリカ式労務管理とのたたかい」で発言、第5回学校では黒川先生が「転機にたつ賃金闘争」の講義を担当したのであった。

▼全労連結成前の総評内の階級的、民主的な運動潮流の統一労組懇は1975年の結成から毎年秋に学習交流大集会を開催していたが、1978年の第4回の大集会と地域共闘研究討論集会では、『労働組合運動の質転換―80年代をめざして』をメインテーマにして、高木先生が「経済民主主義の確立と労働組合運動」、中林先生が「発達した資本主義国における労働組合闘争の現状と統一戦線」の講義を担当している。また地域共闘研究討論集会では、中林先生が記念講演として「今日情勢のもとでの地域共闘のもつ意義」をおこなっている。

また、高木先生は、1980年12月に労働者教育協会の会報No.30に同協会の「80年代における大衆的学習教育研究討論集会」の特集号の冒頭に、情勢・たたかい・学習を励ます春闘向けの「春闘をめぐる情勢と春闘再構築の基本問題」という論稿を発表して、幹部、活動家を激励している。

戸木田・黒川先生を偲ぶつどいを開催＝労働総研

2013年6月15日午後、東京・千代田区にある明治大学付の紫紺館椿山荘で、労働総研運動に教授退官後も一貫して協力してこられた戸木田嘉久先生、黒川俊男先生を偲ぶつどいが労働総研主催で開かれました。高木先生は教授退官後のお仕事は労働総研の運動にあまりかかわってこられなかったためにお2人の偲ぶつどいになったのかと思われます。戸木田先生、黒川先生の教え子であった金沢大学の伍賀先生も日本福祉大学の大木先生もすでに名誉教授、2012年労働総研20周年記念論文でトップ表彰された大阪経済大学の伊藤大一準教授は、戸木田先生の孫弟子と名のっていましたが、直接の教えは受けていないと語っていました。

参加者はそれぞれ芹沢先生の紹介通りの両先生の徹底的に現場主義の作風と同時に、黒川先生が山手線一周の間に電車の中で小論文を書き上げてしまわれたというようなエピソードを語り合い、両先生とお別れしました。金属労働研究所関係では、芹沢さんをはじめ、金田豊、小林宏康、生熊茂実、西村直樹らが参加しました。**写真は労働総研中島さん撮影**